



「梅雨前線の正体」  
 シリーズ新しい気象技術と気象学 4  
 茂木耕作 著  
 東京堂出版, 2012年 6月  
 168頁, 2400円 (本体価格)  
 ISBN 978-4-490-20759-0

最近, 一つ考えが改まったことがあります。

それは, 難解であったり, わかりにくかったりする研究発表を理解できないのは聴衆の責任ではなく, それを押しつける発表者の責任だということです。自分の浅学さをごまかすつもりはありませんが, 毎日その専門を追求している人と, ある日突然その話題に触れる人との間の翻訳をできないようでは, 知識を啓いて後進に伝える学者とはいえない気がします。

そして似たジレンマは, いわゆる「科学書」の分野にも存在します。内容はきつと正確でも, 専門的にすぎるために多くの読者を獲得できない本には, どこか潔癖でとりつくしまのない印象を受けます。かといって, 内容を薄めた本からはその程度の満足しか得られません。

その点, 茂木耕作氏の本書「梅雨前線の正体」は, 梅雨というわかりやすい題材をテーマとしてこのジレンマを気持ちよく打ち破ってくれているという意味で, 今後気象学を一般読者に紹介する書籍を作る際のモデルになるのではないかと思います。

著者はあえて, 気象学的にみた梅雨前線の定義や, 学問的な背景などといった回りくどい解説から始めません。むしろ, 小中学生でもなじみの深い天気図からみた梅雨前線がなぜこれほど安定しないのか?, その振る舞いから何が見えてくるか? という疑問から読者を引き込みます。

本書の組み方もこうした狙いを反映して, 「どこからあれだけの雨のもとになる水蒸気がやってきているのか?」「梅雨といっても雨の降り方がいろいろなのはどうか?」という読者が素朴に感じそうな問いを太字で本文中に配置して, 問いから解説を導くペースを作ります。

1章で天気図的な梅雨前線の姿を読者に解説してイメージを作り上げると, 著者は2章で今度は降水・ドップラーレーダー, あるいは数値モデルを使って描き出される梅雨前線の姿について筆を進めます。先ほどまで天気図という明快なイメージをもっていたはずの梅雨前線の姿はここでいったん読者の頭のなかで解体されてしまいますが, それはさらに詳細なメソ対流系の世界に読者を引き込むための仕掛けに他なりません。

本書のもう一つの特徴として, 非常に人間くさいストーリーテリングの文体が挙げられます。3章では, さらに梅雨前線にまつわる近年の最新の知見が紹介されますが, その一つ一つは, その研究を発表した著者の恩師や同僚との出会いの話題とセットで描かれます。この章では議論が詳細になるため, 海や風, 大気の様子を擬人化しつつ解説が行われます。

一般的な読者は必ずしもすべての議論を追うことはできないでしょう。しかし著者の目を通して, 研究の現場にいる研究者の息づかい, 自然をどのようにみつめているのかという視座を与えられます。そしてこうした科学者の視座こそが, 一般読者がこうした科学書を手に取る際に求めているものでもあるのです。

多少, 気象学的な用語を前提としているために本書を本当に読み抜くには高校生から大学生程度の予備知識が必要とされますが, その一方で上述のような問いをベースにした構成と取っつきやすい文体のために中学生でも背伸びして思わず読んでしまうことでしょう。

本書のタイトルはこうした構成と著者の企みを実によく表しています。読者は本書を通して「梅雨前線のすべて」を知るわけではありません。むしろ, いままで夏に先駆けて生まれる天気図上の線に過ぎなかった梅雨前線の姿を脳裏に構築し, 分解し, 再検討し, さらに高いレベルの真実に向かって議論を深めてゆくうちに読者自身の理解に応じた「梅雨前線の正体」を描いてゆくのです。

みなさんのなかで, 梅雨前線はどんな姿をしていますか?

(海洋研究開発機構 堀 正岳)